

---

# 僕(変態) と君たち(変態) の相談部

めりめり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕（変態） と君たち（変態） の相談部

### 【Nコード】

N8683Y

### 【作者名】

めりめり

### 【あらすじ】

僕が主人公の、ウハウハーレムもの！！

…  
…  
…

すみません調子乗りました。

本当は、僕（変態）と他の君達（変態）が織り成す、相談青春ラブコメディ。え？ラブはない？気にするな

とりあえず、皆、変態です

・エピソード・（前書き）

変態です

シモネタもちよいあります。

間違っても爽やかイケメンは出ません

・エピソード・

「横島君って、変態だよねえ？ちよつとそこを見込んで相談があるんだけど」

高校二年生になって一日目の僕・横島宗<sup>よこしまはじめ</sup>は人生で、157回目の『変態』を言われた。

『変態』

僕はこの言葉のくくりに入れられる人間らしい。

あ、ちなみに僕が言っている『変態』は、幼虫が蛹へ移行するあれじゃなくて、特殊性癖的な人間を指す『変態』の方だ。ここ重要。と、まあ、話を戻して、僕が変態だという話だ。

あと、これ、言ってる何となく微妙に落ち込むが、まあ今は置いておこう。

・・・さて、まず僕が変態であるという理由だが、。。。

まあ、自分を客観的に見て、157回変態と言われてれば意識せざるを得ないだろう。

理由はそれだけ。

いや、もう少し理由があったりするけど、今は関係ない。

僕が言いたいのはそこではない。

僕が言いたいのは、その変態という部分が、なぜか知らんが役に立ったということだ。

具体的に言うと、同クラスの美少女から話しかけられるなんて主人公的イベントが、僕の変態性によって引き起こされた事についてだ。「横島君にちよつと来て欲しいところがあるんだあ」

記念すべき157回目の変態発言をした美少女は、いきなりそんなことを言っ、勝手に歩き始める。というか、この少女は出会って二言目に付いてこいなどと言って、付いてくる人間がいると思っ

いるのだろうか？

……勿論僕は黙って付いていくけど。そもそも美少女の後ろを本人公認でついていけるなんてイベント、僕が見逃すわけじゃないじゃないか。

それに、彼女の制服の着こなし方。これを見て、彼女を黙って見送れる人間など存在するだろうか。

膝上まである黒いニーハイソックス。更にその数センチ上で揺れるスカート。その間に見える白い太腿。生肉！

上は明るい茶色のセーター。それを、彼女はサイズを合わせずに着ている。つまり、ダボダボ。これは！これは！

……お分かりいただけただろうか。

彼女の制服の着方が、一部の人に熱狂的支持をえる着方だということに。

その一部には勿論僕も含まれる。

「く…絶対領域。。。最高すぎる…ッ！」

僕はグッと拳を固める。だって、絶対領域だぞ！？興奮せずして何が男か！

しかし、こういうことを語ると

『えー、たった数センチの、しかも太腿に興奮してるわけ？』

などと言ってくる奴が往々にいるが、あいつらは盛大に勘違いしている。

まず一つとして、胸「おっぱい」や【倫理問題的に自主規制させてもらいます】が見えることがエロい訳じゃない。

胸「おっぱい」。この響きは確かにいい。いや、最高だ。

【倫理問題的に（略）】も確かに、良いときもある。

だが、例えば、美術館などに飾ってある裸婦画を見て興奮する人間などいるだろうか。

美術館で「えっろ！これ、えろ！ちよ、ここ、18禁だろ！」とか言ってる人間がいたら、通報するだろうか？

美術館で「ふむ…これは、エロイですね。この扇情的な形が、ま

た」とか言ってる人間がいたら通報するだろう？

では、なぜ裸に我々は興奮しないのか。

- 答えは簡単。隠されていないからだ。

どんな部位も隠されず、おおっぴろげに堂々と見せつけられること  
によって、僕たちはエロさを感じないのだ。その凜とした態度に、  
美しいと感じるのだ。

そもそも、【倫理問題的（略）】と口など、あまり変わらないのに、  
僕たちは口に何も感じない。いや、感じる人もいるけど（僕）、一  
旦置いておく。

まあつまり、僕たちは、全部が見えるより、体の一部分が露出され  
ているほうが興奮するのだ。

しかしここで勘違いされたくないのが、今僕が述べた理由が、うな  
じ等の部位をエロく感じるのとは違うということだ。これについて  
は、また違う機会にでも説明しよう。

「さ、着いたよ」

と、僕が熱弁していたら、ピタッと、目の前の生肉・・・ゲフンゲ  
フン。絶対領域（さっき語った生肉の部分）が・・・ゲフンゲフン。  
目の前を歩いていた彼女の足が止まった。ここは...廊下の内装的に、  
校舎の旧館だろう。ふむ、結構歩いたみたいだ。

とりあえず僕は一旦（ここ重要）彼女の脚から目を外して、彼女が  
案内してくれた場所が旧館のどこか確認する。

そして僕の目の前には、旧将棋部の部室で、

「相談...部？」

『相談部』という新しいプレートが掛けられた、古びた部屋があっ  
た。

「失礼するっすー。部長、例の横島君を連れてきましたあ」

僕の前を先行していた、絶対少女（名前が分からないので、便宜的  
にこの名前で呼ぶ）は、けだるそうな声で、目の前のドアに向かっ

て話しかける。

余談だが、ドアというものも良いものだと思う。

ドア。それはつまり、自らのプライベートを晒す穴。ドアのなかには入れるかどうかで、相手が自分をどう思っているのかが分かる、便利な器具だ。

ちなみに僕は、身内以外の家上がった事は一度もない。

具体的な例を上げると、同級生が家に入れてくれなかった時に、「あれか、焦らしプレイかな」とか思って、ドアの前に二時間ほど立っていたら、その同級生の父が僕に千円を渡して「帰ってくれ」と懇願されたことがあったかな。

それ以来、誰かの家に行くということをやめた。

代わりにのぞき始めた。

閑話休題。

「あの、君。僕はなんでここに連れて来られたのかな？」

僕は、本当なら最初に聞くべきだったことを聞く。なんで聞いてなかったんだらう。ああ、絶対領域のせいだ。

彼女は、僕の問いを聞いて、

「ちよつと、この相談部に入部してもらいたくてね」と答えた。

「ああ、入部ね。なにげに僕スペック高いもんね。。。つて、入部!？」

「入部だつて!?!?そんな!?!」

そんな重要なことを、この子は黙っていたのか!

それに、部活はキツイ! そうすると僕の、日課が!

「んー? 横島君つて帰宅部っしょ?」

そんな僕の内心も知らずに、彼女は聞いてくる。

首を横にかしげる仕草とか、本当可愛いなあ!!

「.. だけど、

「いや、そうだけど...。でも、放課後は暇じゃないと、僕は...」

「?」

彼女は疑問符を浮かべる。実際には見えないけど浮いてる。

「陸上部の練習が、、見れないじゃないか！！！！」

陽の光と、男子生徒の視線を集めてやまない、あの濃紺のスパッツが……見れなくなってしまう！！

トラックを走り終わったときに頬を伝う、健康的な汗が！

走る前の、女子同士の柔軟が！

走ってる真っ最中の苦悶の表情も！

休憩時に、大びろげに広げられる、脚も！

部活などに勤しんでいたら、見れないじゃないか……ッ！！

僕の、唯一の、青春がッ！！

「…悪いけど、僕には…入部することは…」

ガチャッ。

僕が、絶対少女に入部できない旨を伝えようとした、その瞬間。

いきなり、相談部の（プレートが掛かっていたし、多分部室だろう）ドアが開いた。

そして、中から、

「ん。連れてきたか、三富士君」

ドアから出てきた彼女をあらわせる言葉は、『美しい』しか無かった。

ただ美しい。どうしようもなく、美しい。

凜とした顔つき。雪のように白い肌。全てを呑み込む漆黒の髪。小さい口から出た、透き通っているが芯のある声。etc…

全てが『美しい』だった。

しかし、それゆえか。

彼女はどこか虚しかった。

「あ……」

僕は声にならない声を上げて、彼女を見つめ続ける。



「いや、正確には、「目を離すことが出来なかった」

体が、僕の意識を無視して、彼女から目を話すことを赦さなかったのだ。

そして、そんな不可解な現象を前に言葉も出ない僕に向かって、彼女は言った。

「相談部へ、ようこそ」

にゅづぶ！(平仮名の方が可愛いだろう？)(前書き)

相談部。それは僕のハーレム！！

……じゃなくて、変態の巣窟

にゅーぶ！（平仮名の方が可愛いだろう？）

「私は、丘栗《おかしづく》。役職は相談部部长。趣味は支配だ！」  
『彼女』は自信に満ち溢れた顔で、高らかに言い切った。

相談部の中から出てきた『彼女』に、無理やり中に入れられ、僕は  
イっちゃいますうううううう！！

- - - じゃなくて、僕は困っていた。

なにせいきなり高らかに自己紹介をされたのだ。誰でも困るだろう。

「あ、私は、三富士文《みふじふみ》っす。趣味は百合っす」

そしてその後、絶対少女も自己紹介したが、なんというか印象に残りにくかった。

『彼女』のいきなりの自己紹介のせいで、僕は少し混乱してしまっ  
たからだ。

僕はあそこまで堂々と自己紹介できた奴を一度も見たことなかった。  
そして多分これからもないだろう。

そう思わせるほどに、『彼女』は堂々としていた。

まるで、自分に恥じるべきところなど、どこにもないといった感じ  
で。

それが、『彼女』の美しさを更に加速させていた。

「横島氏、君の変態さを見込んで、お願いがある」

『彼女』は僕の混乱などお構いなしに話を進める。

僕の事情など知ったことではない、というように。

- 否。僕の事情などどうでもいいのか。

『彼女』にとっては、自分が全てなのだ。

趣味が支配なんて馬鹿げた物も、それ故にだろう。

だから今、僕を支配しようと侵略中なのだ。

「…入部ですか？」

僕は混乱する頭を必死で抑えつけ、どうにか聞く。

「ん。そうだ。話が早いな」

彼女は満足げにうんうん、と頷く。その姿さえ様になるのだから、

『彼女』は本当に人の上に立つような人間なのだろう。

しかし、この圧倒的自信はどこから来るのだろうか。

「さて、じゃあ、この紙に名前を…」

彼女は自らのバッグから一枚の紙と、ペンを取り出し、渡してきた。

僕は返事してないんだけど……。

「あの、、、僕、、、陸上部の練習を…」

「ん？」

「いや、陸上部が…」

「ん？」

「スパッツだよ!!! スパッツが見たいんだよ!!!」

「ん？」

……圧殺された。。。イジメレベルだったたる今の。

なんか、女王様って感じだなあ。

ハアハア。

「そんなに、スパッツが見たいのかい？」

僕が女王様という単語に悶えていると、『彼女』が口を開いた。

「みたいですよ!!! 男の夢ですよ! いや、本当ならブルマがいいけ

ど!」

ぐっと拳を固めて、僕は叫ぶ。

スパッツが見たくない男なんて、そんな男じゃない!

スパッツこそ、身近にある男の夢だ、と。

そう僕が熱弁すると、『彼女』は「ふむ」と声を漏らし、

スススつと、

僕の目の前で、

スカートをたくし上げていた。

「うおおおおおおおおお！……！！！」

僕は思わず雄叫びをあげていた。

だって、スカートの中には、

「ブルマ……ッ！！！」

ブルマが履いてあったのだ。

……たくし上げブルマ！！僕は今、新たな境地を開いてしまっ  
た！！

肉の食い込み、全てを飲み込む濃紺！そして普段は見えない内腿！

！！！！！！！！

こんなことがあつていいのだろうか！？

「ど……どうだい？私のお願ひ、聞いてくれるかな？」

ここで聞こえる『彼女』の声。

ひ……卑怯な！！こんな事されたら、……！！

聞かない訳にはいかないじゃないか。

「入……部させてください」

こうして僕は相談部に入った。

そこが変態の巣窟とは、知らずに……。

にゅづぶ！(平仮名の方が可愛いだろっ?) (後書き)

次回、メンバー紹介

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8683y/>

---

僕(変態)と君たち(変態)の相談部

2011年11月27日01時49分発行